

第8回「市民と市長のふれあいトーク」の内容（要旨）

と き 8月21日(水)

テーマ 東日本大震災・原発事故の避難者が笑顔で暮らせるまちに

参加者 森さん夫妻、林田さん夫妻 ほか2人

東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故を受け、福島県や関東地方から津山市に避難している6人が、市長と意見交換を行いました。

大きな不安を抱え津山市へ避難

参加者は、福島第一原子力発電所の事故の後、子どもが体調を崩したこと、将来の身体への影響などを考え抜いた結果、住み慣れた土地を離れる決断をしたことを語りました。

そして、避難先として、自然災害のリスクが低い津山市を選んだことや家庭の事情により母子で避難していること、厳しい就業環境や子育て環境にあることなど、見知らぬ土地で生活する避難者が多くの不安や苦勞を抱えていることを語りました。

市長は、参加者の苦勞や、それを乗り越えるための頑張りに共感するとともに、市では、子育て支援など定住促進に力を入れていることを説明しました。

手続きと情報を1箇所で

参加者から、市役所での手続きや情報の受け取りが1箇所でできることが必要との意見が出ました。

また、津山への避難者が、今後も増えると思うので、避難者に対する支援策を継続する必要があるのではないかと意見も出ました。

市長は、情報提供や手続きが、迅速、正確に行えるように努め、支援策のあり方についても検討していきたいと話しました。

地域資源や魅力をPRすべき

参加者から、おいしい空気やきれいな川など、津山の地域資源や魅力を都会の人たち、特に、若者へPRすべきとの意見が出されました。

また、都会の若者を対象とした交流イベントを行ってみてはどうか、との提案もありました。

市長は、豊かな自然の中で、都会の若者と津山市民が交流できるイベントを考えてみたいと話しました。

人と人とのつながりが大切

参加者は、周囲の人たちに支えてもらい助かっていること、特に、シェアハウス「来んちゃい家」(田町)の存在は大きく、心のよりどころになっていること、そして、人と人とのつながりが何よりも大切で、避難者と周囲の人たちが理解・協力し合い、安心して、笑って暮らしていきたいと話しました。

また、今後、避難者を受け入れる際は、避難者の苦労や悩みが共感できるので、何か手伝いをしたいとの思いを述べました。

市長は、参加者の思いに感謝し、今後、一層、避難者と行政や市民グループが、うまく連携していくことが大切と話しました。